

ドイツ・クレーフェルト時代のヨハン・トルン・プリッカーと日本の染型紙

落合 桃子 (福岡大学)

ヨハン・トルン・プリッカー (Johan Thorn Prikker, 1868-1932) はヤン・トーロップ (Jan Toorop, 1858-1928) と並んでオランダの象徴主義の画家として知られ、代表作に《花嫁》(1892-93年)がある。1890年代後半からは、家具やテキスタイルのデザイン、オランダ領東インドの蠟染め(バティック)なども手掛けている。

1904年、36歳の時、新たに開校した工芸学校の絵画の兼任教員として、ドイツ西部のクレーフェルトに拠点を移した。本発表では、この時期に制作された、魚や昆虫、鳥などを題材とする水彩画・リトグラフを取り上げる。《二尾の魚》(1903/4年)では、カサゴのような魚が橙色や紫色などの不透明水彩で描かれている。その他、バッタや鷲、ノコギリエイなどを表した作品があり、タツノオトシゴ柄のネクタイ用の絹織物の織見本も残されている。

これらの作品群について、ハイザーは、アール・ヌーヴォーの潮流や工芸学校の教育に言及している(Heiser, 2008年)。発表者は、トルン・プリッカーが1904年頃に集中的に自然のモチーフに取り組んでいたことに注目し、ここに日本の染型紙との関連を新たに指摘する。

トルン・プリッカーをクレーフェルトに招聘したのは、カイザー・ヴィルヘルム美術館初代館長のフリードリヒ・デーネケン(Friedrich Deneken, 1857-1927)であった。ハンブルク美術工芸博物館に勤務していたデーネケンは1896年、染型紙の図版100点を収めた『平面装飾のための日本のモチーフ』(全10分冊)を刊行している。和紙を柿渋で貼り合わせた型地紙に文様などが切り彫りされた染型紙は、日本の染色技法の一つである型染に用いられるもので、『KATAGAMI Style』展(2012年、三菱一号館美術館他)で明らかにされたように、19世紀後半から20世紀初頭の欧米で広く収集されていた。クレーフェルトは絹織物産業の発展した都市で、デーネケンが美術館長に着任した1897年にさっそく染型紙を購入したという(デランク、2012年)。自然に立ち戻ることが装飾芸術を健全なものにする第一条件と考え、デーネケンが職人やデザイナーに日本の染型紙を参考にするよう推奨した。トルン・プリッカーの一連の作品は、デーネケンが企画した1904年の展覧会『線と形』に出品されて、同時代評でも称賛され、同館のコレクションに入った。

以上のように、トルン・プリッカーは1904年頃にデーネケンとの交流を通じて日本の染型紙、そして装飾芸術における自然モチーフの重要性を知り、自然の対象を形取った水彩画やリトグラフに取り組んだと考えられる。1910年にクレーフェルトを離れるが、魚や鳥のデザインは、その後、精力的に制作されたステンドグラスや壁画の中で、新たな命を得ることになる。